

石川町立歴史民俗資料館移転整備 基本計画（案）

石川町教育委員会

目 次

1. 移転整備の方針	2
1-1 施設の現状と課題	2
1-2 移転予定地の概要	4
2. 施設全体の役割	5
2-1 施設整備方針	5
2-2 施設の機能	5
2-3 諸室の留意点と基本構成	6
3. 展示の基本的考え方	9
3-1 展示の基本テーマ	9
3-2 展示ストーリー	9
3-3 展示ストーリーの主な構成要素	10
3-4 展示室ゾーニング	29
4. 主要な展示手法	30
4-1 展示の留意点	30
4-2 基本的な考え方	30
4-3 主要展示物の展示手法	31
4-4 展示什器の仕様	32
4-5 体験展示	33
5. 情報計画	34
6. 収蔵計画	35
6-1 収蔵設備の基本的な考え方	35
6-2 収蔵スペースのゾーニング	36
7. 運営方針	37
7-1 活動内容	37
7-2 運営組織	38
8. その他	40
8-1 整備スケジュール	40
8-2 財源及び事業費の検討	40

1. 移転整備の方針

1－1 施設の現状と課題

石川町立歴史民俗資料館は、本町の文化と歴史を伝える資料の収集保存及び活用を図り、町民の教育・学術及び文化の発展に寄与することを目的として、昭和49年に建設されました。同館には、本町産鉱物標本を中心に全国に誇ることができる歴史文化資料や地質資料を収集・保存・展示しており、年間約2千人が来館しています。

しかし、開館から47年が経過し、多くの課題が山積しています。施設的な課題として大きくは以下の4つの課題が挙げられます。

○収蔵資料の増大

開館時から、多くの関連資料の収集が行われてきましたが、収蔵庫が満杯で空きスペースがないため旧公民館、立ヶ岡倉庫などに分散して保存されています。一括管理ができないため、調査や保存環境の確認などに影響が出ています。

○不安定な展示・収蔵環境

現在の資料館及び収蔵スペースは、調湿機はもとより空調設備すら設置されていないため、温湿度管理が全くできていません。また照明設備や展示什器も開館当初のままであり、展示資料は必要以上の照度や外光にさらされています。このままの状態が続くと、資料が劣化する恐れが高く、後世へ貴重な資料を引き継ぐことができなくなる可能性があります。

○ユニバーサルデザインへの対応

現状の施設は、入口部が階段となっている上に、3階建ての館内にエレベーターが設置されていません。また展示什器や展示解説なども多様な来館者を受け入れる状態になっていません。

○展示内容の陳腐化

展示内容について、企画展において最新成果の展示を行っているものの、常設展示については、最新の調査研究成果や学説などが反映されていません。

また本町では「共に創る 幸せ実現のまち」を将来像として掲げ、資料館に関連する各種関連計画等を掲げています。しかしこれら関連計画が求める資料館像に対し、現資料館では対応がしきれない部分が増えています。

○「石川町第6次総合計画」（令和元年度～10年度）

本町の基幹となる総合計画。「豊かな心・町民文化を育むまち」を教育分野の基本目標としています。

○「石川町教育大綱」（令和元年度～5年度）

「誰もが生涯にわたって学び、生きがいを持って生活できるよう、生涯学習の充実と文化、芸術、スポーツの推進を図るとともに、地域の歴史、文化、自然の保護・活用を図り、郷土を愛する心の醸成を図る」という基本方針のもと、「文化の振興と歴史資源の継承」「鉱物の保存・活用」を施策として掲げています。

○「石川町歴史文化基本構想」（平成30年3月策定）

歴史文化を活かしたまちづくりを持続的に進めることで、ふるさとの誇りを共有し、豊かな歴史文化を将来に伝えていくことを目標に掲げています。このなかで、歴史民俗資料館の現状と課題について、老朽化に加え、十分な展示及び保管スペースがないことから、改修の必要性が求められています。

これら多くの課題を解決し、関連施策との整合性を図るため、町では旧ホテル松多屋の土地及び建物を取得し、整備を図ることとしました。旧ホテル松多屋は結婚式場として建設されていたため、常設展示室となりうる大型の宴会場があるほか、延床面積が広く、十分な収蔵スペースを確保することも可能です。また石川町の主要道路である国道118号線沿いに位置し、広い駐車場も確保できるなど立地条件にも優れています。

旧ホテル松多屋を新たな歴史民俗資料館として整備することで、町民に対し町域に優れた歴史文化資源や地質資源が存在することを正しく伝えるとともに、町外からの来訪者に対しても広く石川町の魅力を広げる拠点とします。また増大する収集資料の調査研究・保存・活用の拠点としても活用していきます。

本計画は、石川町、有識者、地域住民等で構成される「石川町立歴史民俗資料館整備検討委員会」において作成された「石川町立歴史民俗資料館移転整備基本構想」を踏まえ、石川町が移転・整備する「石川町立歴史民俗資料館」の基本的な考え方を示すものです。

1－2 移転予定地の概要

石川町立歴史民俗資料館の移転予定地である旧ホテル松多屋は、町役場から程近い、町の中心部に位置しています。交通面では国道118号線沿いに位置し、車でのアクセスがしやすい場所にあります。

名 称：旧ホテル松多屋

住 所：石川郡石川町字長久保96

敷地面積：9,002.87㎡

延床面積：2,931.37㎡

アクセス：JR水郡線磐城石川駅から約2km、あぶくま高原道路玉川ICから約8km



外観



内部（大宴会場）

2. 施設全体の役割

2-1 施設整備方針

移転整備される歴史民俗資料館では、単に展示・収蔵を行うだけではなく、来館者に対して明確なメッセージを伝えることを目指します。新しい資料館が掲げる施設整備方針は、以下の2つとなります。

1) 石川町のすばらしさを伝える

- ・石川町の持つ歴史・文化・自然の素晴らしさを来館者に伝え、体感できる施設とします。

2) 地域プライドの醸成

- ・石川町を担う次世代の子どもたちに対する地域プライドの醸成、「石川プライド」を育てる場として活用できる施設とします。
- ・石川町の素晴らしさを示す素材の発見により「石川プライド」はその厚みを増していきます。常に石川町の魅力を発信できる施設とします。

2-2 施設の機能

本施設は、以下の5つの主たる目的や機能を備えます。

分かりやすく伝える	石川町の持つ歴史・文化・自然の特徴が理解できるように、さまざまな資料・研究成果をわかりやすく伝える
資料の収集・調査・研究・DB	各種資料の収集・調査・研究の充実に努める
学校教育支援	学校教育を支援する
生涯学習の場	生涯学習の場として多様なニーズを持つ町民の学習機会を支援できるように、町民の生涯学習活動及びその成果発表の場に活用できる、複合的機能を持った施設とする
住民交流の場	気軽に集まり、活動でき、住民同士の交流が促進できる、町民集いの場として活用できる施設とする

2－3 諸室の留意点と基本構成

1) 諸室の留意点

諸室は、以下の3点について留意し、整備します。

■十分なスペースの確保

- ・展示空間、調査研究、資料保存、教育普及、情報サービス活動等の十分なスペースの確保

■ユニバーサルデザイン

- ・障がい者や高齢者に対する配慮
- ・バリアフリー（多目的トイレ、身障者用駐車場、スロープ、手すり、点字ブロック、杖・車椅子の無料貸出）

■避難誘導

- ・災害発生時の入館者のスムーズな避難誘導経路の確保

2) 諸室構成

新しい石川町立歴史民俗資料館における諸室の構成及びその内容については、次ページの表の通りとなります。大きく分けて「展示関連」「教育普及、貸館機能、交流機能」「収蔵、調査研究、バックヤード」の3つの機能があります。また屋外についても、駐車場の整備のほか、屋外展示場として積極的に活用を図ります。

3) 施設全体ゾーニング

1) 諸室への留意点と2) 諸室構成をもとに施設全体のゾーニング案を作成したものが8ページの図となります。基本的に既存施設を流用することを念頭に、諸室を割り振っています。大きなスペースが確保できる宴会場は展示スペースに、独立した空間が確保できる厨房は収蔵スペースとします。また既存施設の利用で室数が限られるため、一部スペースについては、複数の機能を兼用させる多目的スペースとします。

諸室構成表

屋内	展示関連	常設展示室	・音響に注意した明るく静かな空間 ・密にならない資料展示、余裕のある動線確保、圧迫感のない天井部の高さ
		企画展示室兼多目的室	・休息空間の設置と照明（展示場内にベンチ等を設置） ・場内は暗めにして展示物にスポット照明
		美術展示室	・移動可能な展示ケースの設置 ・収蔵資料の劣化及び防火・防犯に備えた展示・収蔵設備の整備 ・余裕ある展示空間
		展示準備室	・展示備品の収納、展示準備作業ができるスペース
	教育普及 貸館機能 交流機能	企画展示室兼多目的室	・講演会、ギャラリー利用
		多目的ホール 会議室兼 貸館スペース	・体験学習、講演会利用 ・地域に開かれた施設を目指し、町民が作品を展示でき、集会ができる貸館スペース
		図書閲覧室	・本町に関連する文献や書籍等の資料が閲覧できるスペース ・情報コーナーの設置 ・レファレンスルーム併用
		ミュージアムショップ	・既刊報告書や企画展図録、町史等の刊行物の販売 ・施設オリジナルグッズの販売
		オープンスペース	・「集会スペース」：気軽に集まることができる交流スペース ・「飲食スペース」：飲食が可能な交流の場の設置、自動販売機の設置 ・「キッズスペース」：未就学児が遊べるスペース
	収蔵 調査研究 バックヤード	収蔵庫	・永続的な資料の収蔵・保存・展示を行うため、温度調整できる空調設備等の設置と展示室・収蔵庫の充実 ・防火・防犯に備えた保管・収蔵設備
		研究室兼 事務室	・収集した資料の調査・研究を行うための設備 ・町に関する自然や歴史に関する調査・研究を行うための設備
		資料整理室兼 事務室	・作業室（一時保管、クリーニング、受付事務、撮影）の設置 ・資料の鑑定や調査、解読等ができる環境を整備
		バックヤード	・企画展示室兼多目的室で利用していない備品類の収納
		その他	・フロント ・水場 ・トイレ ・授乳室 ・倉庫
屋外	屋外展示場	・石の展示	
	駐車場	・駐車スペースと進入路の確保	

施設全体ゾーニング図

〈凡例〉

	: 展示関連
	: 教育普及、貸館機能、交流機能
	: 収蔵、調査研究、バックヤード
	: 収蔵庫



3. 展示の基本的な考え方

3-1. 展示の基本テーマ

『石川町歴史文化基本構想』において本町の歴史文化的特徴は、「文化の結節の地」「阿武隈川と人々の暮らし」「東日本初の自由民権運動」「人々の暮らしと祭礼」「地質資源と人々との関わり」の5つとしており、人々は豊かな自然資源のもとで独自の歴史文化を育んできたとしています。

また、『石川町鉱物館整備基本構想』では、地質資源が地域の歴史文化を大きく特徴づけておりとし、基本テーマを「鉱物のまち石川～鉱物と人々との関わり～」としています。

上記2つの構想で指摘された共通点は、本町の歴史文化は大地（自然資源）と人々の結びつきから生まれ、今まで育まれてきたことでもあります。

これまで連綿と受け継がれてきた物語を、未来に向けて発信することを本施設の使命とします。

以上を踏まえ、本施設の展示テーマを下記の通りとします。

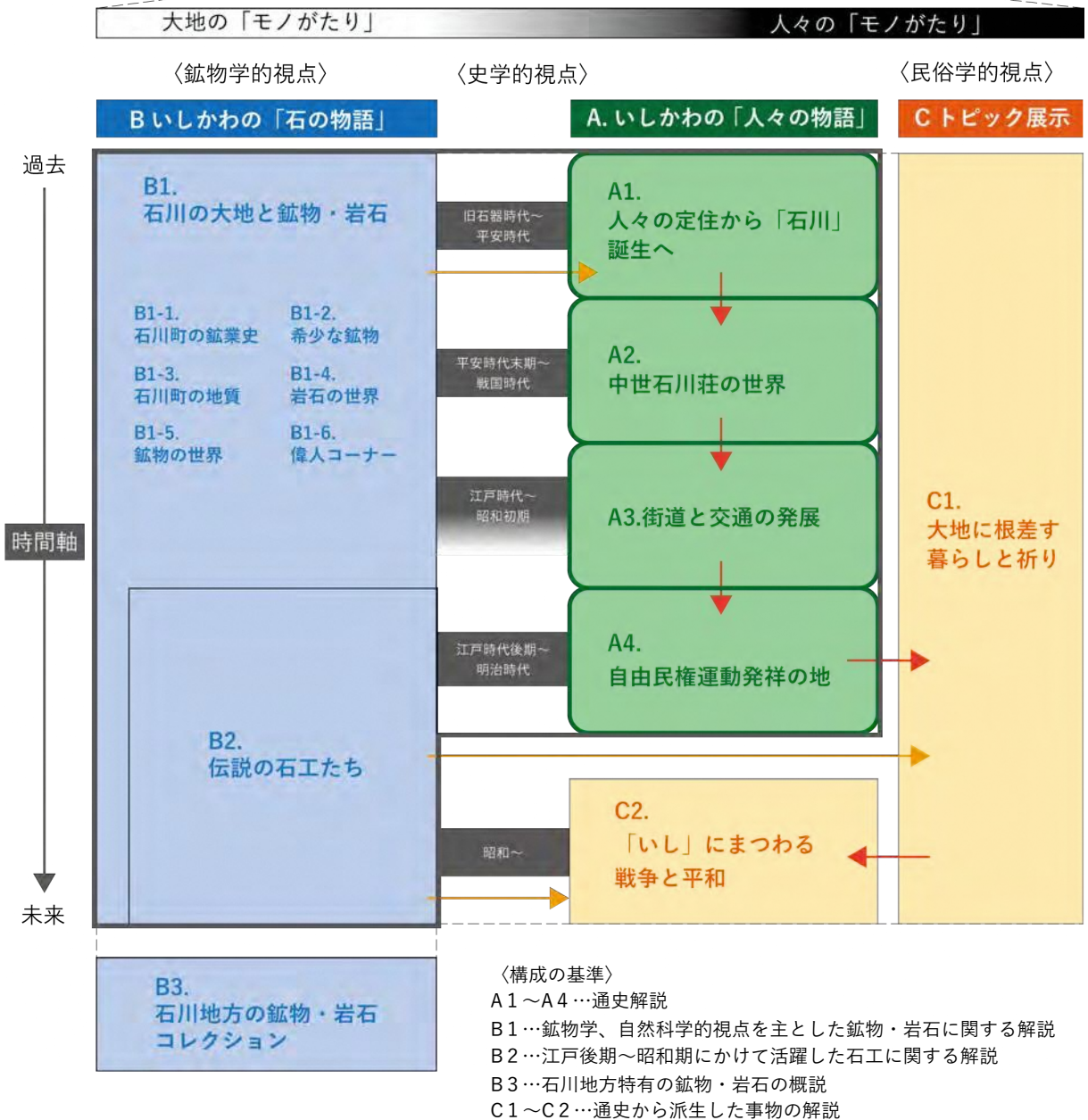
【展示テーマ】
石川の大地と人々が織りなす「モノがたり」

3-2. 展示ストーリー

本施設の展示テーマを実現し使命を果たすため、次ページに示す展示ストーリーの構成を行います。

【展示テーマ】

石川の大地と人々が織りなす「モノがたり」



通史解説を軸に、トピックとして民俗展示・戦争と平和に関する展示を配置し、人々が紡いできた石川町の物語をわかりやすくひもときます。通史と並行して石に関する解説をし、石川町の人々の暮らしと石との関わりについて深く理解することができる構成とします。

3-3. 展示ストーリーの主な構成要素

3つのテーマ、9つのカテゴリからなる展示ストーリーの主な構成要素は、次ページ以降の通りとなります。なお、上記「B3. 石川地方の鉱物・岩石コレクション」は、B1の展示ストーリーの主な構成要素に包含されます。

A：いしかわの「人々の物語」

A 1：人々の定住から「石川」誕生へ

時代：旧石器時代～平安時代

ストーリー

～ 阿武隈川河岸段丘に見られる遺跡に、東西文化の結節を見る ～

石川町の西側を流れる阿武隈川東岸には多数の遺跡が存在する。なかでも、後期旧石器時代から弥生時代にかけて、東西の文化がクロスオーバーしたことで生み出された文物が数多く発見されている。

例えば、後期旧石器時代の背戸 B 遺跡からは、東北型と関東型のナイフ形石器が出土している。縄文時代の源平 C 遺跡では、前期前葉から中葉期にかけて、関東地方に分布域を持つ関山式・浮島式土器が出土土器の主体を占めている。また、七郎内 C 遺跡では、東北南部から関東地方北部に分布域を持つ「七郎内 C 遺跡Ⅱ群土器」型式の標識遺跡であると同時に、同遺跡からは関東東部を中心に分布する阿玉台式土器が出土しており、南東北と関東の土器文化の交流の様子が見て取れる。そして、鳥内遺跡では弥生土器の中に骨を入れる再葬墓群の中に、北九州が淵源の遠賀川系土器や、東海地方から直接運ばれたと考えられる水神平式土器が出土している。さらには、新潟方面、北関東方面の土器も出土している。

上記の様相は、原始時代を通して集団間の移動や接触による地域間交流が、当地域で盛んに行われた結果であると言える。

古墳時代以降は、前期に阿武隈川の支流である社川西岸の段丘に集落が営まれるが、この時期の古墳を見ることは少ない。6 世紀後半以降は阿武隈川の上位段丘に大塚古墳群や悪戸古墳群等の古墳が築かれ、集落は古墳よりも低位段丘に営まれる傾向にある。

奈良・平安時代になると、阿武隈川上位段丘に比較的大規模の集落が営まれる。達中久保遺跡では約 100 棟の住居跡が検出されている。その一方で、社川低位及び中位段丘、そして山間部や開析谷に小集落が爆発的に進出する。これは、律令期以降に土地の開墾が盛んになったことの証左である。しかし、人々は低位段丘に進出するも、水害の危険性からより高位の段丘へと移らざるを得なかった。

主な展示構成要素

上悪戸遺跡出土石英製石器
背戸 B 遺跡出土ナイフ形石器
源平 C 遺跡出土土器
七郎内 C 遺跡Ⅱ群土器と阿玉台式土器
鳥内遺跡、再葬墓、遠賀川系土器、水神平式土器
大塚古墳群、悪戸古墳群
達中久保遺跡

キーワード

阿武隈川東岸の遺跡
旧石器から弥生時代の遺跡や遺物群
東西文化の結節点
古墳群及び古墳時代の集落遺跡
壱田永年私財法と律令期の遺跡
阿武隈川の洪水と律令期の遺跡

主な展示構成要素解説

背戸 B 遺跡



せとびーいせき

時代：後期旧石器時代

発掘調査によってナイフ形石器のほか、尖頭器・錐・削器・チョッパー等、約 160 点の石器が出土。ナイフ形石器については、東北地方の日本海側でみられるタイプと、南関東でみられるタイプの二種類が出土しており、東西文化の結節が見られ、旧石器時代の人々の移動を考える上で大変重要な成果が得られている。

鳥内遺跡

とりうちいせき

時代：弥生時代



●県指定史跡 ●県重要文化財（考古資料：出土土器 91 点）

弥生前半期の壺棺再葬墓群が多数検出された。北九州地方に分布する遠賀川式土器を模倣した所謂「遠賀川系」土器、東海地方から直接運ばれたとされる水神平式土器、これに北関東系の土器や新潟方面の土器、そして在地系の土器と、5 つの地域相が見て取れる。また、全国でも出土点数が少ない人面付土器も発見されている。

鳥内遺跡出土人面付土器

とりうちいせきしゅつどじんめんつきどき

時代：弥生時代



●県指定重要文化財

鳥内遺跡から 1 点出土している。壺を伴う再葬墓が廃れた後に、土器や人骨を破碎する新たな再葬墓が行われた時期の所産である。顔には入れ墨や耳栓をした表現が見て取れ、弥生人の習俗が本資料から分かる。全国でも出土点数が少ないため、大変貴重な考古資料である。

大壇古墳群

おおだんこふんぐん

時代：古墳時代



●県指定史跡

前方後円墳 3 基と円墳 5 基からなる古墳群。6 世紀初頭から 7 世紀初頭までの約一世紀の間に築造された。なかでも 1 号墳は石川地方最大の前方向後円墳で、長さが約 39m を測る前方部が発達した後期古墳の特徴を持つ。周溝の跡も見ることができる。

悪戸古墳群

あくところふんぐん

時代：古墳時代



●県指定史跡

横穴式石室を持つ 9 基の円墳からなる古墳群である。7 世紀初頭頃からの築造。これらのうち、周溝が確認できる古墳もある。1 号墳は長さが最大で約 20m。石室内を発掘調査したところ、鉄鏃や刀子が出土した。



← 鳥内遺跡での再葬の様子

『ビジュアル石川町の歴史』より

A 2 : 中世石川荘の世界	
時 代：平安時代末期～戦国時代	
ストーリー	
～ 平安時代から戦国時代を駆け抜けた中世の武士団・石川氏の世界を見る ～ 石川氏は、石川氏の祖・源（石川）有光が、12 世紀後半に石川地方に土着したところから始まる。現在の矢吹町、中島村、玉川村、石川町、平田村、古殿町、浅川町、鮫川村を支配した。 石川氏の特徴は、南奥の一武家であるものの、その時々々の為政者と近い関係にあったことが指摘できる。例えば、平安時代には平泉藤原氏と近い関係にあった。これは柳之御所出土の折敷に藤原清衡から衣服を与えられた人々が列記された中に、石川一族の名を見ることから分かる（「人々給絹日記」）。また、平安仏である薬王寺本尊の木造薬師如来坐像は、平泉藤原氏との関係性をうかがうことができる資料である。 鎌倉時代には幕府の御家人、御内人として中央政権に近い関係にあった。殿内遺跡群出土かわらけ（土師質土器）を分析したところ、大小 2 種のセットをなすこと、そして法量及び製作技法が、鎌倉政権関連遺跡から出土するものに近似していた。また、石造供養塔婆（板碑）については、本町で約 300 基が確認されているが、頭部三角、切込線を二条入れる関東型板碑の流れを汲むものがほとんどであることから、関東武士団とのつながりが強かった石川氏が、仏教文化も共有していたことを裏付ける資料と言える。 南北朝時代、室町時代も中央政権とのつながりを持つ。室町幕府は奥羽支配のため稲村（須賀川市）に足利満貞、篠川（郡山市）に足利満直を派遣するが、満貞は幕府と敵対する鎌倉公方持氏を取り込み、一方、満直は幕府方と組み、さらに前者は石川氏、後者は白川氏を巻き込んでの争いが激化。白川氏の隆盛は石川氏にとって脅威であり、対抗するため徐々に惣領家の一族支配を進めていく。しかし、永享の乱・結城合戦を経て、一層弱体化の一途をたどる。 戦国時代は芦名・佐竹・伊達の間で翻弄される。石川昭光は佐竹と蘆名の間を行き来するが、やがて蘆名・佐竹連合軍と伊達氏の抗争が勃発すると、甥の政宗との関係を強くしていく。しかし、天正 18 年（1590）の昭光小田原不参により石川氏は奥羽仕置の対象となり、領地は没収され、現在の宮城県角田の地へと移る。 奥羽仕置により石川の地を離れるまで、400 年間以上、石川地方を治めた。	
主な展示構成要素 石川氏、石川一族 薬王寺薬師堂、薬王寺本尊木造薬師如来坐像 かわらけ（土師質土器） 関東型石造供養塔婆（板碑） 石川一族関連中世城館、石都々古和気神社の鰐口 石川公墓地、中世文書（角田石川家文書他） 石川大蔵院文書、薬王寺の版木 石造供養塔婆（板碑）、石造五輪塔	キーワード 平泉藤原氏と石川氏、佐竹氏と石川氏 鎌倉幕府の御家人・御内人であった石川一族 鎌倉公方と篠川・稲村公方 室町幕府と石川一族 石川昭光と伊達正宗

主な展示構成要素解説

三芦城跡（石川城）	みよしじょうあと（いしかわじょう）	時代：～戦国時代
	石川昭光が奥羽仕置で領地を没収されるまでの、石川氏の居城である。三方は急な崖で、花崗岩が露出した天然の要害である。西から愛宕台、西館、本丸で構成される山城で、本丸と西館の間には、かつて長さ 50 m の空濠（濠切）があった。現在、本丸跡には石都々古和気神社が鎮座する。	

石都々古和気神社の鰐口

いわつつこわけじんじやのわにぐち

時代：室町時代



●県重要文化財

石都々古和気神社は、三芦城跡（石川城）の本丸に築かれた神社である。応永 30 年（1423）に奉納された銅製の鰐口には、「奥州石川庄泉村館之八幡宮之鰐口也応永卅年癸卯卯月五日大旦那源持光別当重慶敬白」の銘があることから、石川持光が寄付したものと分かる。石川地方で最古の鰐口である。なお、鰐口の全面に金箔が貼られていたことが、現在でも分かる。

伊達政宗書状

だてまさむねしょじょう

時代：戦国時代



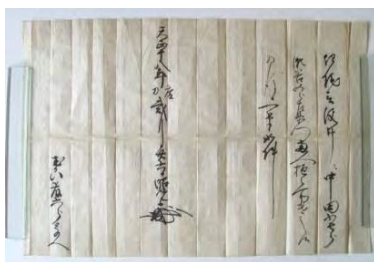
●町指定文化財

天正 18 年（1589）10 月頃に、伊達政宗の叔父にあたる石川昭光に送った書状。このころ、昭光は常陸国の佐竹氏に従っていたが、翌年には、ひそかに政宗と手を結び、政宗の配下となった。この書状は、昭光が政宗と手を結ぶ直前のもので、石川氏と石川町の歴史にとって重要な文書である。

迎森一文書

むかいもりかずもんじょ

時代：戦国時代



●町指定文化財

天正 18 年（1590）の秋、豊臣秀吉が天下統一を果たし、戦国時代が終わる。石川昭光は領地を没収され、石川の地を去った。この文書は、天正 18 年 2 月 26 日の日付であり、現在まで確認されている石川に残された最後の昭光の文書で、町内山形の迎家に長く伝えられたものである。

石川公墓地

いしかわこうぼち

時代：室町時代～戦国時代



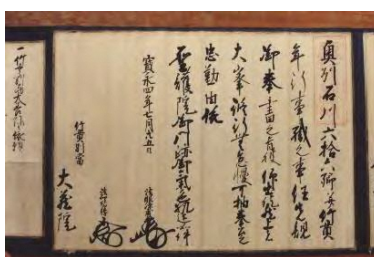
●町指定史跡

高源山長泉寺にある、石川駿河守義光以下七代の石川氏の墓地で、墓石以外にも室町時代に造られた石塔も確認できる。長泉寺の創建については同寺の古記録に、永享 8 年（1436）、義光が関東地方から曹洞宗の高僧即庵宗覚を招き開山したとあり、この墓地の成立と符合していることが分かる。

石川大蔵院文書

いしかわだいぞういんもんじょ

時代：中世期



●県指定重要文化財

石川大蔵院は、元禄年間頃まで八大院と呼ばれ、中世以来、石川 66 郷、さらに竹貫郷の熊野参詣先達職と年行事職を、幕末まで続けた修験で、この文書は八大院の時代を経て大蔵院に伝わった。もとは 3 巻だったが、現在は 2 巻が残るだけである。1 巻（応安 3 年（1370）の頃の文書）は失われたものの、八大院（大蔵院）に伝来したこれらの文書は、中世石川荘及び近世石川郡と竹貫の修験の歴史にとって非常に貴重な文書である。

薬王寺薬師堂薬師如来坐像

やくおうじやくしどうやくしによらいざどう 時代：平安時代



●町指定文化財

薬王寺薬師堂の本尊で、平安末期の作とされる。像高 56.8cm で桂材の一木造り。平成 4 年（1992）5 月に修理されたものの、現状でも材が腐食していたりと保存状態は良好とは言えない。仏像の風化の理由については、平安時代に石川氏による泉谷（現在の旧市街地）の開発が行われたが、度重なる洪水のため中断し、その後廃絶され、本尊が野晒しになっていたためと考えられている。

薬王寺薬師堂

やくおうじやくしどう

時代：平安時代（江戸時代）



●町指定文化財

薬師堂は正面三間、側面三間の方形。堂内には平安末期の作とされる本尊の薬師如来坐像が納められていることから、寺自体が平安時代末期には存在し、地域の人々の崇敬を集めていたことは確かである。なお、堂内には元文 2 年（1737）銘の須弥壇があることから、そもそもは平安時代の建物であったものが、江戸時代の中頃に再建されたことが分かる。

薬王寺の版木

やくおうじのはんぎ

時代：鎌倉時代～南北朝時代



●県指定重要文化財

薬王寺には、正慶元年（1332）と康暦 2 年（1380）の銘が見られる版木 81 枚が残されている。仁王般若経版木が 11 枚、妙法蓮華経版木が 70 枚である。これらから、薬王寺が盛んに経文を印刷して、仏教を広める活動をしていたことが分かる。

曲木石造供養塔婆群

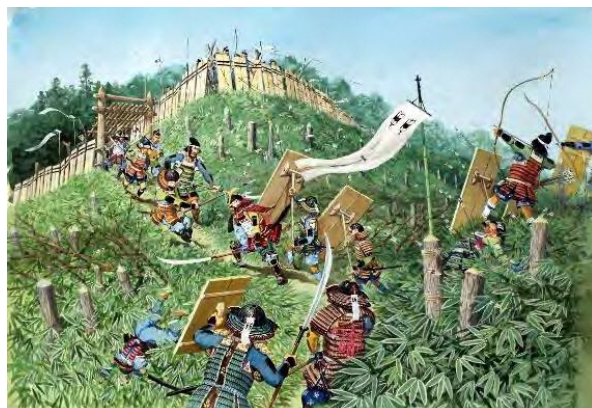
まがきせきざうくようとうばぐん

時代：鎌倉時代



●町指定文化財

14 基の石造供養塔婆群（板碑）からなり、いずれも鎌倉時代の紀年銘がある。釈迦如来、虚空蔵菩薩等の種子が見られるなか、胎蔵界大日如来塔婆には建治元年（1275）の銘があり、これは本町で最古の板碑である。頭部が三角形につくられ額部が発達した関東系の板碑が造られたことから、関東武士団との仏教文化の共有が見て取れる。なお、石材は地元のデイサイト質凝灰岩である。



← 宇津峰城での合戦の様子

『ビジュアル石川町の歴史』より

A 3 : 街道と交通の発展

時代：江戸時代～昭和初期

ストーリー

～ 海浜と内陸を結ぶ要衝の地「石川」 ～

江戸時代は、武士勢力が一掃されたことで、城はもちろん、陣屋さえ構えられることはなかった。住民の多くは村落に居住したが、町中心部は石川氏時代の城下町がそのままに存在し、そこには商工業者が集住し、所謂「在郷町」としての発展が見られた。また、海からはるか離れた山間地でありながら、塩、漁獲物、海産物加工等を買付け業者が集まる宿場町として栄えた。いわき方面からの街道の様子を伝えるものに、坂路村絵図や道標が残る。

武士がいない時間が長く続いたため、庄屋を中心とした話し合いによる自治が形成された。この状況は、特に富裕層には閉鎖性がなく、精神的文化的に自由な気風となって現れた。例えば、下泉村大庄屋鈴木家の薬医門を下野の宮大工集団に依頼する、乗蓮寺の梵鐘を下野国佐野の鋳物師に外注する等があげられる。近世期の資料としては「下泉庄屋鈴木家手控」があげられる。内容は多岐に分かれ、石川六町の市日や神事日の決定、大名通行に伴う宿割り等々、これまで知られなかった記録が大部分である。無指定ながら、当時の石川地方全体の様子を伝える極めて重要な資料であり、今後、資料の解析等を進めることが必要である。またこの時期の建築物には、東北北部（宮城県・岩手県）、北関東、新潟地方の大工技術が融合した様相が見て取れる。

明治時代以降、街道が整備され、特にいわき方面と白河方面をつなぐ「御斎所街道」の宿場町として栄えた。また、鉄道網も整備されるようになり、水郡線が整備され、これにより本町産の石英・長石が西日本へと出荷され、産業の一翼を担った。その一方で、磐城鉄道（白石鉄道）のように、9割軌道が完成していたにもかかわらず、開通できなかった鉄道もある。

主な展示構成要素

鈴木家薬医門、下泉庄屋鈴木家手控、
乗蓮寺の銅鐘、華蔵寺の銅鐘、道標
大正 14 年の鳥瞰図（福島県石川町真景）
御斎所街道、磐城鉄道軌道跡、水郡線
旧市街地の町並み

キーワード

在郷町、庄屋を中心とした話し合いによる自治
海浜と内陸間との交通路
御斎所街道の宿場町
古建築に見る文化の結節点
鉄道網の整備と挫折

主な展示構成要素解説

下泉庄屋鈴木家手控

しもいずみしょうやすずきけてびかえ 時代：江戸時代



筆者は寛政 8 年（1796）生まれの同家 17 代庄右衛門。記事の主要部分は、慶安年間（1640 年代後半）から明和年間（1760 年代後半）であるが、一部中世の記事も含まれる。内容は多岐に分かれ、石川六町の市日や大名通行に伴う宿割り等、これまで知られなかった江戸時代の町の様子が記録されている。

鈴木家門

すずきけもん

時代：江戸時代



●町指定文化財

鈴木家は、江戸時代の大庄屋で、武士の身分に相当する郷士を名乗ることができた。門はその郷士の特権として建てるのが許されたと考えられ、非常に手の込んだ造りで、所謂「薬医門」である。文化 4 年（1807）に、栃木県芳賀郡市貝町出身の宮大工、町井六左衛門によって造られた。

坂路村絵図

さかじむらえず

時代：江戸時代



御斎所街道の街道沿い、現石川町大字坂路近辺の絵図。寛政年間に描かれたものと思われる。高札場も描かれている。

磐城鉄道（白石鉄道）

いわきてつどう（はくせきてつどう）

時代：大正時代～昭和初期



大正 9 年、白河市と石川町を結ぶ鉄道計画で、昭和初期まで建設工事は行われたものの、実に九割方工事が完成しながら、汽車が走ることはなかった幻の鉄道である。軌道跡は、今では自動車道となったり、畑や住宅地になったりして現風景の一部に溶け込んでいるものの、現在でもその姿を確認できる遺構が多々ある。

福島県石川町真景

ふくしまけんいしかわまちしんけい

時代：大正時代



大正 14 年（1925）10 月 7 日に松井天山によって描かれた旧市街地の鳥瞰図。御斎所街道と奥州街道へ向かう石川街道の結節点となる「新町四つ角」を中央に配し、図の左下から左上にかけて御斎所街道が、図の左上に石川街道、右下にかけて母畑温泉郷が描かれている。現在の道筋とほとんど変わらないことから、約 100 年前の旧市街地の様子を今に伝える貴重な資料である。

A 4：自由民権運動発祥の地	
時 代：江戸時代後期～明治時代	
ストーリー	
～ 明治初期、「自由の伸暢、権利の拡充、社会の改良」を求めて、人々は立ち上がった ～ 江戸時代最末期の戊辰戦争は、直接的な被害はないものの、石川地方に暗い影を落とした。農民たちの不満は徐々に高まり、明治元年（1868）12月の世直し一揆で爆発する。石川地方の庄屋等の家屋が襲われたのだ。南山形地区の矢内家住宅大黒柱に、その時の状況が今も見る事ができる。これまで、幕末期の石川地方の様子を文献で見ることができなかったが、近年翻刻された浅川町の庄屋が記した『慶應四戊辰日記』には、当時の庶民の様子が克明に描かれており、大変貴重な資料である。やがて、庄屋制度が廃止され、戸長が置かれるようになると、庄屋層が各所で活躍するようになる。 明治7年（1874）9月に、鈴木家主屋（通称：鈴木重謙屋敷）に石川区会所が置かれると、河野広中が初代区長として赴任する。河野の思想に同調した吉田光一、鈴木荘右衛門、吉田正雄等の戸長層が中心となり、自由民権運動の組織的な先駆けとなる「有志会議」が結成された。そして、明治11年（1878）には東日本初の民権結社「石陽社」の結成に至る。石川地方での運動は、市井の人々が参画し、且つ若者が多く演説会に参加している点は、土族中心に展開した各地の民権運動とは異なる。また同年には、もう一つの結社、第二嚶鳴社が結成されるが、まだ不明な点が多く今後の研究が待たれる。 明治23年（1890）の国会開設により自由民権運動が落ち着きを見せると、自由民権運動家達は町政、県政、国政へと進出する。一方、青少年教育の重要性が広く認識され、民権家であった吉田光一、鈴木重謙は町長となり、現在の学校法人石川義塾、県立石川高等学校の創立に深く関わった。	
主な展示構成要素 南山形矢内家住宅、石川区会所、河野広中 鈴木家主屋、有志会議、石陽社、第二嚶鳴社 河野広中、吉田光一、鈴木荘右衛門・重謙親子 吉田正雄、慶應四戊辰日記 石川小学校日誌	キーワード 世直し一揆から石川地方の自由民権運動へ 河野広中と自由民権運動 東日本初の政治結社「石陽社」 石陽社と第二嚶鳴社 自由民権運動家と青少年教育

主な展示構成要素解説

慶應四戊辰日記



けいおうよんぼしんにっき

時代：江戸時代～明治時代

山白石村（現浅川町）の大庄屋・松浦孝右衛門が慶応4年（1868）1月元日から明治2年（1869）6月30日までの一年半を記録した日記。本資料からは、石川・県南地方での戊辰戦争と、その後に発生した世直し一揆について新しい事実が多数明らかになっている。なお、大庄屋鈴木家に関する記述も日記中に見ることができる。

鈴木家主屋



すずきけしゅおく

時代：江戸時代～明治時代

●町指定文化財

明治元年の打ちこわしに合い、近隣の農家を移築したと伝えられる。自由民権運動で活躍した鈴木荘右衛門・重謙親子の住まいであり、明治7年（1874）9月に石川区会所として使用され、自由民権運動の先導者で衆議院議長も務めた河野広中が、初代区長として執務にあたった。また、明治12年（1879）2月～15年（1882）10月まで石川郡役所としても使用された。通称、鈴木重謙屋敷。

河野広中

こうのひろなか

時代：江戸時代～明治時代



旧三春藩郷土。明治 7 年(1874) 9 月に石川区会所が置かれ、初代区長として赴任する。その傍ら、自由民権運動を推進し、同運動の組織的な先駆けとなる「有志会議」を結成。さらに、東日本初の民権結社「石陽社」の結成に至る。その後、福島・喜多方事件で逮捕されるも、県政に進出し県議会議員に、さらに国政にも進出し農商務大臣、衆議院議長を務める。(写真は石川区長時代の河野広中、三春町歴史民俗資料館提供)

石川小学校日誌

いしかわしょうがっこうにっし

時代：明治時代



石川小学校所蔵の明治 11 年(1878)の学校日誌には、東日本で最も早く自由民権運動が始まった本町の歴史を伝える記事がある。明治 8 年(1875)に結成された「有志会議」のメンバーが学校を訪れ、新たにスタートする民権結社「石陽社」の結成会場として、石川小学校講堂の借用を申し込んでいる。町の近代史上の重要な場面が、その日の出来ごととして記録されている点は、歴史的資料としての価値が高い。

吉田光一

よしだこういち

時代：江戸時代～明治時代



弘化 2 年(1845)、石都々古和気神社神官の吉田家に生まれる。神官の傍ら自由民権運動に目覚め、有志会議の創設、石陽社結成に係る。明治 19 年(1886) には福島県会議員、同 22 年(1889) 石川村長、同 25 年(1892) 石川義塾(現学校法人石川義塾) の創設に尽力、同 27 年(1894) 初代石川町長に就任。明治 28 年(1895)、51 歳にて死去。(写真提供：学校法人石川義塾)

鈴木重謙

すずきじゅうけん

時代：江戸時代～昭和時代



安政 5 年(1858) 生まれ。明治 13 年(1880) 頃から石川郡自由党员として活躍。若手弁士として演説会で熱弁を奮う。政治活動の一方、行政分野で手腕を発揮し石川村の戸長、議長、石川村外 4 カ村の戸長を務め、明治 23 年(1890) に県会議員、明治 39 年(1906) に石川町長に就任。教育分野での功績も顕著で、明治 40 年(1907) には私立石川中学校(現学校法人石川高等学校) の認可に尽力、大正 12 年(1923) には石川実科女学校(現県立石川高校) の認可に尽力した。昭和 4 年(1929)、72 歳にて死去。



← 鈴木家主屋前で演説中に警官に制止される鈴木重謙『ビジュアル石川町の歴史』より

B：いしかわの石の物語

B 1：石川の大地と鉱物・岩石

時代：地質時代及び明治～現代

ストーリー

～ 石川の大地を構成する地質、鉱物を求めた人々の営み、地学教育を推進した人々の軌跡 ～

本町の地質は、東側が変成岩帯、中央が花崗岩帯、西側が堆積岩帯と3つの地質からなる。平成28年(2016)には日本地質学会によって、福島県の「県の石」として、鉱物部門に「石川町のペグマタイト鉱物」が、岩石部門では本町の東側で見られる「片麻岩」が選ばれ、2冠を達成した。なかでも、花崗岩帯は日本三大ペグマタイト鉱物産地の1つに数えられ、鉱物の種類と大きさでは国内随一の規模を誇る。通称「石川山」は、町内でも最大規模のペグマタイト鉱脈が眠るとされる。ここから産出する石英・長石は、明治時代以降、国内の窯業における生産拠点の1つとして盛んに採掘された。

和久観音山ペグマタイト鉱床は、唯一、坑道跡が見学できる第1鉱体、国内最大級の電気石の群集が坑道天盤に見られる第4鉱体がある。明治40年代頃から、ガラス等の原料となる石英や陶磁器の釉薬原料の長石が採掘されたことから、産業遺産としての価値が高い。石英と長石の採掘は昭和40年頃まで続き、和久観音山から北に約1.5kmの水郡線野木沢駅から東海方面に輸送された。野木沢駅には当時の貨車引き込み線跡が今でも残る。アジア・太平洋戦争末期には、陸軍の要請で、国策会社の帝国鉱業開発株式会社によって、サマルスキー石、鉄コロンブ石等の希元素鉱物の採掘も行われた。

石川町立歴史民俗資料館では、県指定天然記念物「石川のペグマタイト鉱物」26種50点及び「球状花崗岩」の外、日本産新鉱物の第1号である「石川石」をはじめとして数多くの石川地方産鉱物と、世界の鉱物等が展示されている。

また、地学教育を推進した人材もいる。石川義塾（現学校法人石川義塾）の創設者である森嘉種は、鉱物研究に熱心に取り組んだ。そして、理科教員の傍ら、子供達への地学教育の普及に努めた、三森たか子がいる。なお、森嘉種は収集した鉱物標本の展示施設として、学校法人石川義塾鉱物館を設立している。

主な展示構成要素

花崗岩、変成岩、和久観音山ペグマタイト鉱床
石川のペグマタイト、球状花崗岩
野木沢駅、石川石
石川町立歴史民俗資料館
森嘉種、三森たか子
学校法人石川義塾鉱物館

キーワード

ペグマタイト（巨晶花崗岩）
花崗岩帯と変成岩帯
鉱業と旧鉱山跡、石川山
国内窯業生産拠点、ガラス原料
軍事利用目的の鉱物採掘
希元素鉱物、地学教育

主な展示構成要素解説

和久観音山鉱床

わぐかんのんやまこうしょう

時代：地質時代・近現代



●県指定天然記念物

ペグマタイトの規模が日本最大級と言われる鉱山跡。明治時代の学術雑誌にも取り上げられるほど、古くから研究されてきた。また、石川町で最初に産業のために鉱物を掘り始めたのが当鉱床である。本町には100ヵ所近い鉱山跡が確認されているが、石川鉱石採掘跡保存会によって管理されている本鉱床のみが、坑道内に入って見学することができる（第1鉱体）。また、国内最大級の電気石の群集が坑道天盤に見られる第4鉱体は圧巻である。

変成岩

へんせいがん

時代：地質時代



町域の東側に分布する岩石である。海底にたまった泥や砂等が、地下深くにおいてマグマの熱や強い圧力を受けてできた岩石で、受けた熱の温度や力の強さ等の違いにより、結晶片岩や片麻岩等に分けられる。独特な縞模様が見られ、庭石としても利用されている。

石川のペグマタイト鉱物

いしかわのpegumaito kōbutsu

時代：地質時代



●県指定天然記念物

ペグマタイト（巨晶花崗岩）とは、石英や長石等からなる岩石である。これらは、明治時代後半から昭和 30 年代頃まで盛んに採掘が行われ、石英・長石の外、雲母、電気石、ザクロ石、緑柱石、希元素鉱物等、さまざまな鉱物が発見された。石川地方では 155 種類以上の鉱物が確認されており、他の地域に比べて結晶が大きいのが特徴である。26 種 50 点が県の天然記念物に指定されている。

球状花崗岩

きゅうじょうかこうがん

時代：地質時代



●県指定天然記念物

球状花崗岩は、中生代白亜紀（1 億 4400 万～6500 万年前）の頃にできた、6～8cm の大きさの丸い花崗岩である。内部は、中心に黒雲母が集まり、その周りに石英やカリ長石の粒が円をなしたり、放射状に並んでいる。このように並ぶものは世界的にも成因状珍しい。

森嘉種

もりよしたね

時代：江戸時代～昭和時代



文久 2 年（1862）、白河城下会津町に生まれる。16 歳で水戸の自彊舎に学び、18 歳で教員の道へ。明治 25 年（1892）、石川義塾（現学校法人石川義塾）創立。明治 40 年に私立石川中学校を設立。明治 36 年（1903）に東京帝国大学地質学教室に学んだ後、熱心に鉱物研究に取り組んだ。森の研究により新たな鉱物が発見され、また鉱物産地として石川町の名が知られるようになった。昭和 8 年（1933）、72 歳にて死去。

三森たか子

みもりたかこ

時代：大正時代～平成時代



大正 10 年（1921）東京都出身。東京大空襲により父の実家である本町に疎開する。教員として理科を教える傍ら、石川の石の魅力に気付き、大学教授らから教えを受けながら熱心に調査研究を続けた。得た知識は子供達に還元すべく、幾冊もの教育用副読本を自費出版した。まさに「大地教育の母」である。晩年は文化財保護のために尽力された。平成 27 年（2015）、93 歳にて死去。

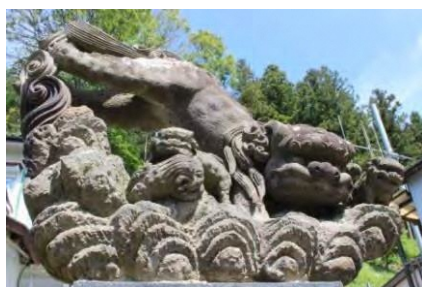
B 2 : 伝説の石工たち	
時 代：江戸時代～昭和時代	
ストーリー	
～ 三代にわたる伝説の石工（いしく）たち ～ 福島県南部には、江戸末期から昭和期にかけて、小松利平・小松寅吉・小林和平に代表される石工の作品が所在する。 小松利平の出自については不明な点が多いが、浅川町福貴作（ふきさく）に工房を開き、地元で産出する軽くて丈夫なデイサイト質凝灰岩を原材料として、石造物を作成した。利平は作品に明確な銘を刻んでいないため推定の域を超えてはいないが、本町にもその作品を見ることができる。 利平の養子に入った本町出身の小松寅吉は、利平のもとで修業を積み、飛び跳ねる構図をとる所謂「飛翔獅子」と呼ばれるスタイルを生みだす等、独創的で超絶技巧を駆使した作品で、石造物を芸術の域まで昇華させた。県南地方を中心に活躍してきたが、その技術を乞われて、栃木県や京都の寺院にも作品が残る。 本町沢井出身の小林和平は、小松寅吉の弟子となり、寅吉の技と伝統を受け継ぎつつ、寅吉とは異なる独創的な芸術作品を生み出した。なかでも、「石都々古和気神社の狛犬」は、昭和 5 年（1930）作と新しいものの、現在の技術でもって復元することができない彫刻技術を駆使した作品であり、美術工芸的にも価値の高い貴重な資料として、平成 28 年度に町指定有形文化財（彫刻）として指定されている。その卓越した彫刻技術による本作品は全国的に評価が高い。	
主な展示構成要素 赤羽八幡神社の狛犬、王子八幡神社の狛犬 石都々古和気神社の狛犬、近津神社の石造神馬 石都々古和気神社の五重塔 小松利平、小松寅吉、小林和平、石切り場	キーワード 石造物 石工 飛翔獅子 デイサイト質凝灰岩 福貴作石

主な展示構成要素解説

石都々古和気神社の狛犬

いわつつこわけじんじやのこまいぬ

時代：昭和時代



●町指定文化財

石川町出身の石工・小林和平が昭和 5 年（1930）に世に出した作品である。所謂「飛翔獅子」と呼ばれる、雲に乗って後ろ脚を跳ね上げる姿は、石でつくられた狛犬としては他には見ることがなく、非常に優れた彫刻技術から、全国的に高い評価を受けている。美術工芸的にも価値の高い貴重な文化財である。（写真は雌獅子）

王子八幡神社の狛犬

おうじはちまんじんじやのこまいぬ

時代：昭和時代



昭和 14 年（1939）に作られた作品。石都々古和気神社の狛犬同様、「飛翔獅子」の形態をとる。この作品には銘は無いものの、彫刻技術から推察して、小林の作品であることは間違いない。ただし、弟子である遠藤秀一がこの作品に携わっていた可能性が高く、それ故、銘を刻まなかったのかもしれない。（写真は雄獅子）

石都々古和気神社の五重塔

いわつつこわけじんじやのごじゅうのとう 時代：昭和時代



昭和 13 年（1938）に作られた作品。現在は本殿の北側に建てられているが、もともとは麓の参道階段入口付近ににあった（「飛翔獅子」の後ろ側に台座が残っている）。内部は空洞になっており、階層ごとに分離することができる構造になっている。

石都々古和気神社御仮屋の狛犬

いわつつこわけじんじやおかりやのこまいぬ 時代：昭和時代



昭和 14 年（1939）の作品。「飛翔獅子」の形態ではなく、一般的な狛犬像に見られる蹲踞スタイルである。石工銘は台座建立に携わった大竹俊吉（現大竹石材）と連名で刻んである。
（写真は雄獅子）

小林和平

こばやしわへい 時代：明治時代～昭和時代



明治 14 年（1881）、石川町沢井村に生まれる。10 代前半で浅川町福貴作の石工・小松寅吉に弟子入り。寅吉の彫刻技術を受け継いで、昭和初期から戦前戦後にかけて県南地方で活躍した石造彫刻家である。狛犬彫刻を始めとして、石造物を芸術の域まで開花させた名工として知られている。昭和 41 年（1966）、84 歳にて死去。

近津神社の石造神馬

ちかつじんじやのせきぞうしんめ 時代：明治時代



●町指定文化財

明治 30 年（1897）、小林和平の師匠である小松寅吉による作品。日清戦争に軍馬として徴用され倒れた当地方の農耕馬や運送馬を慰霊するため、地元南町の有志一同が建立した石造物である。

デイスait質凝灰岩

でいさいとしつぎょうかいがん 時代：地質時代



デイスait質凝灰岩は火山岩の一種で、火山灰や火山岩の破片が堆積してできた岩石。石川町で見られる凝灰岩の多くは、約 170 万年前～70 万年前（一部は 700～ 170 万年前のもの）の火砕流の堆積物である。

人の手で加工しやすいため、石材として彫刻や板碑等に利用されていた。

C：トピック展示

C 1：大地に根差す暮らしと祈り

時 代：全時代

ストーリー

～ 大地に根差した暮らしと、暮らしの安定を祈る祭礼 ～

本町には人々の生業と生産に係る文化財が、今も伝えられている。

生業では養蚕、稲作があげられる。当地では盛んに養蚕が行われており、国登録有形文化財である添田家住宅、有賀家住宅とともに養蚕業で財を成している。稲作については、種蒔き時期を知らせる一本桜が町内のあちこちにあり、これらが巨木となったものも多く、春先には町内各地で勇壮な姿を見ることができる。なかでも、県指定天然記念物の石川の高田ザクラは、樹齢 500 年とされる巨木である。

生産としては馬産と製炭業があげられる。馬産は江戸時代、場所は不明ながら石川町内でも馬市が開かれ、良質な馬が売買されていた。近代期になると、中田地区の二本ブナ周辺に軍用馬を訓練するための養駒場が作られた。製炭業は、中田出身の大竹亀蔵が従来の炭窯を改良した「大竹式炭窯」があげられる。製炭技術を進化させ全国に普及させた。

一方、生業や生産の安定を祈ると同時に、村の安寧と豊作等を願う年中行事や祭礼が盛んに行われた。母畑・中田地区に伝わる「ささら舞」は、五穀豊穡、村内安全、厄難災徐、天下泰平を願う祭礼で、三匹獅子舞等の奉納舞が、秋の収穫前に執り行われた。沢田地区では現在でも「赤羽天道念仏踊り」が行われており、これは、例年 7 月に豊年祈願と害虫駆除を目的とした虫送り行事である。このほか、新屋敷安産地蔵尊数珠繰や庚申信仰等、丑寅生まれの方々の信仰を集める福満虚空蔵堂等、様々な民間信仰が行われている。なお、本町では珍しい、サカイノカミである「ワラ人形祭り」を、中田字八又地内で見ることができる。

主な展示構成要素

大竹式炭窯、寺社仏閣、ささら舞
赤羽天道念仏踊り、ワラ人形祭り
新屋敷安産地蔵尊数珠繰、福満虚空蔵堂

キーワード

養蚕、養蚕農家、稲作、馬産
年中行事と祭礼
ささら舞と念仏踊り
民間信仰
サカイノカミ

主な展示構成要素解説

種蒔き桜



たねまきさくら

時代：—

稲の種蒔きの時期を、近くの山の南斜面に桜が花を付け始める頃を目安としたところもあり、そうした桜は種蒔き桜と呼ばれる。町内に多く見られ、これらが巨木になったものもいくつかある。沢井の安産地蔵尊の桜（左写真）も、農家に種蒔きの時期を知らせる桜だと伝えられている。

養駒場跡



ようくじょうあと

時代：昭和時代

中田地区二本ブナ周辺にある、軍用馬を訓練した「養駒場跡」が残っている。一周 400m 程のトラック状に造られており、強脚な軍馬を鍛錬するため平坦ではなく、急な傾斜が付けられている。アジア・太平洋戦争以前からここで馬を訓練したが、大戦が逼迫するにつれて、廃止された。

福満虚空蔵堂



ふくまんこくぞうどう

時代：江戸時代

●町指定文化財

天正年間（1573 年～1591 年）に石川昭光の姉・浄仙尼が、尾巻山に小庵をつくり、山頂に虚空蔵尊を置いたのが始まりとされている。本尊である虚空蔵菩薩像は徳一大師作と言われており、丑年・寅年生まれの人たちの守り本尊として厚い信仰を集めている。

大竹式炭窯



おおたけしきすみがま

時代：大正時代

中田出身の大竹亀蔵が従来炭窯を改良したもの。これまでの木炭は脆くて輸送中に崩れてしまっていたが、この炭窯により、しまりの良い木炭を製造することが叶った。大竹は大正 14 年（1925）には福島県製炭指導員となり、県内で大竹式炭窯の講習会を開いたばかりでなく、青森・群馬・長野・栃木・新潟県等で指導にあたり、各地に普及させた。

中田のささら



なかだのささら

時代：江戸時代～

●町指定無形民俗文化財

毎年 9 月に、八坂神社と湯殿山神社で行われる民俗芸能行事。ささら舞（三匹獅子舞）、神楽舞、鍾馗の舞、白鯢踊り等からなる。天下泰平、五穀豊穰、村内安全、厄難災除を祈る祭りである。

赤羽天道念仏踊り



あかばねてんとねんぶつおどり

時代：江戸時代～

その起源は 200 年前と伝えられる。赤羽八幡神社にて豊年祈願と害虫駆除を願い、7 月第 2 週の土日を含む 3 日間、青年達のみで執り行われる。初日に村の境界や田の入口に注連縄を張り、浴衣姿の青年が四人一組になって、腰に太鼓を下げ叩きながら「ナーモ ダブツ（南無阿弥陀仏）」と唱和して 6 か所の辻を巡る。2 日目と 3 日目は夕方に八幡神社境内で行われる。

としなはり



としなはり

時代：江戸時代～

中田字八又で 300 年前から続く行事で、旧暦 6 月 1 日に執り行われる。武者が腰に 2 本の刀を差して走っている姿にワラ人形を作り、最後に顔を描く際には、悪者を撃退するために出来るだけ怖い形相に描くようにする。その人形を街道に面した村の入口と田んぼを挟んだ山の間に、縄を張って吊るす。悪病や災難が人形の下に入ってくると、人形が腰の刀を抜いて切りかかるという意味で行われている行事である。



↑ 現在の歴史民俗資料館での有形民俗資料の展示状況

C2：「いし」にまつわる戦争と平和	
時 代：昭和時代	
ストーリー	
～ アジア・太平洋戦争末期の地域秘話 ～ 昭和 12 年（1937）に日中戦争が勃発してからは、軍需品としての希元素鉱物の需要が急速に高まり、主に朝鮮半島や中国東北部の資源が開発され、採掘された鉱石は理化学研究所の工場で科学的に処理された。アジア・太平洋戦争末期には、悪化した戦況を奪還しようと、陸軍は二号研究（原爆開発研究）を推し進めたことは、昭和の秘史として人の知るところである。その原料であるウラン鉱石は、制空海権の失われた当時の軍部において、石川地方から産するウラン鉱の採掘に期待が寄せられた。 陸軍は、理化学研究所の飯盛里安研究室に原料調達を要請し、「石川山」を中心に地元の旧制石川中学校（現学校法人石川高等学校）の学生を学徒動員して、ウラン鉱採掘を行った。歴史民俗資料館裏には、希元素鉱物の選鉱場であったジルコン工場（理研希元素工業扶桑第 806 工場）の基礎擁壁が残されている。また、沢田地区には本土決戦に備えて造成された飛行場跡も残る。 なお、赤羽八幡神社の参道にある石造狛犬は、日本国憲法が公布されてから、ちょうど 1 年後に小林和平によって建設されたもので、台座には「平和記念」と刻まれている。	
主な展示構成要素 希元素鉱物、飯盛里安 ジルコン工場跡(理研希元素工業扶桑第 806 工場) 赤羽八幡神社の狛犬、沢田飛行場跡 小林和平	キーワード アジア・太平洋戦争、理化学研究所 二号研究、ウラン鉱石選鉱場、石川山 学徒動員 戦争と平和

主な展示構成要素解説

ジルコン選鉱工場跡

じるこんせんこうこうじょうあと 時代：昭和時代



歴史民俗資料館の西側（福島県立石川高等学校敷地内）に所在する。アジア・太平洋戦争末期に建設され、当初は「日本ジルコン鉱業研究所石川鉱山」、後に「理研希元素工業株式会社扶桑第 806 工場」と名付けられた。本工場は、我が国で極秘に進められていた「二号研究」（原爆開発研究）の、ウラン鉱石の選鉱場として稼働していた。その基礎遺構が現在も残る。

学徒動員

がくとどういん

時代：昭和時代



アジア・太平洋戦争末期には陸軍の要請で、国策会社の帝国鉱業開発株式会社によって、放射性鉱物のサマルスキー石、鉄コルンブ石等の希元素鉱物の採掘が行われた。また、本町産出の希元素鉱物の軍事目的利用が注目され、陸軍の要請を受けた理化学研究所は「二号研究」（原爆開発研究）に着手し、地元の旧制中学校生徒を学徒動員して、通称石川山にてウラン鉱採掘を行った。

沢田飛行場跡

さわだひこうじょうあと

時代：昭和時代



陸軍は戦局が切迫してきた昭和 20 年（1945）3 月頃から、本土決戦に備えるため飛行場の建設を本町に検討し、起伏のない沢田の地形に目を付け、農家から強制的に畑を収容し建設に着手した。滑走路は県道白河石川線の北側を 80m 程離れて並行し、幅 50～60m、長さ 1,700m の規模で作られた。同年 6 月 1 日、完成していない飛行場に複葉機が着陸し、その後単葉機 1 機が着陸しただけで、終戦を迎えることとなった。現在は畑となっている。

飯盛里安

いいもりさとやす

時代：明治時代～昭和時代



明治 18 年（1885）、石川県生まれ。東京帝国大学で放射性鉱物を研究し、理化学研究所（理研）に入所。アジア・太平洋戦争時は、陸軍が理研に委託して始まった「二号研究」（原爆開発研究）で、飯盛研究室は原料調達を担当した。昭和 20（1945）年 4 月、飯盛研究室は東京から石川町に疎開。同年 7 月初め、飯盛家は家族で石川に移住し、間もなく終戦を迎える。戦後 4 年間窯業研究、後に石川地方の鉱物（特に石英）を原料として、人工宝石の開発にも力を入れた。昭和 57 年（1982）、96 歳にて死去。

平和記念狛犬

へいわきねんこまいぬ

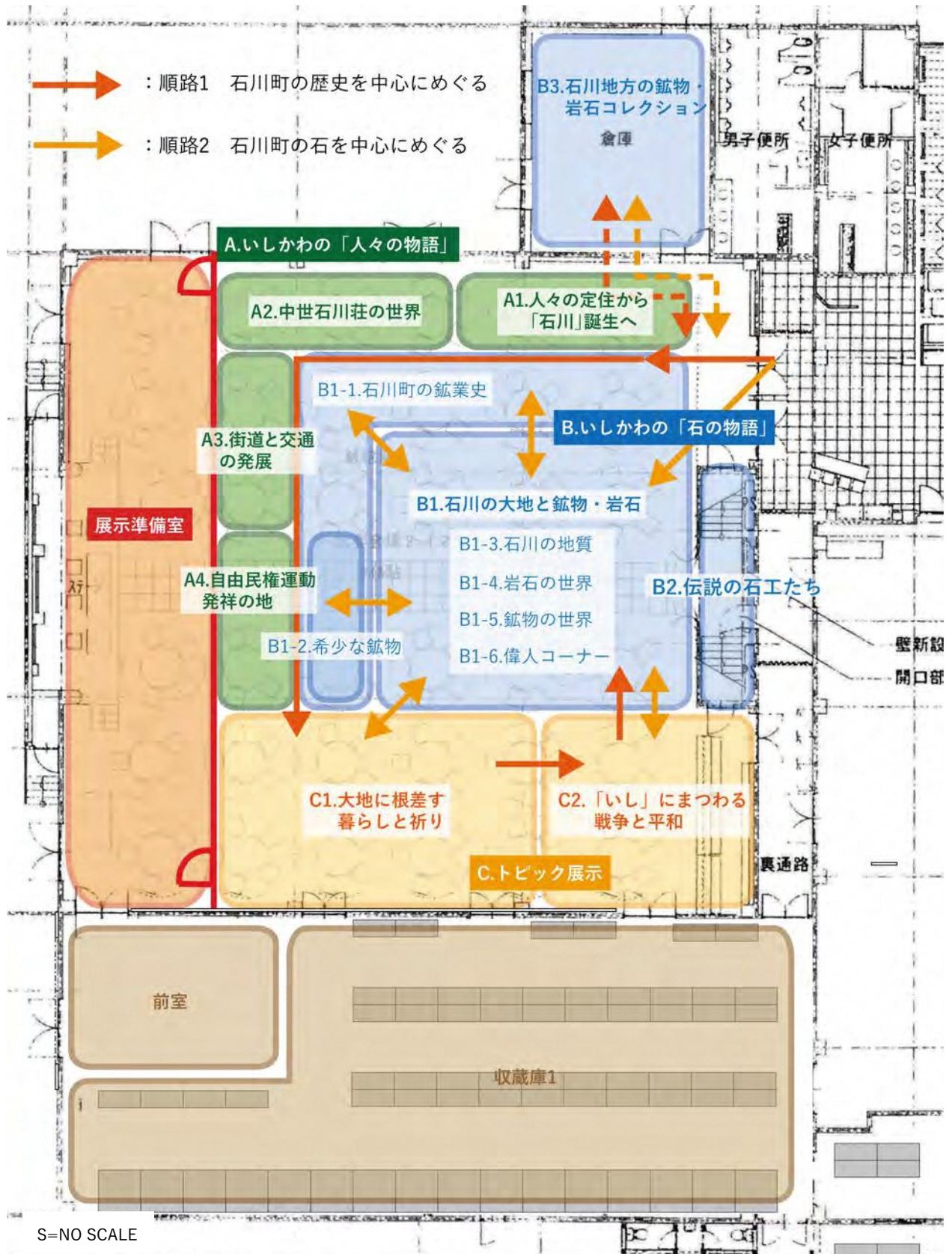
時代：昭和時代



赤羽八幡神社の参道にある石造狛犬。昭和 22 年（1947）11 月 3 日、日本国憲法が公布されてから、ちょうど 1 年後に小林和平によって建設された。台座には「平和記念」と刻まれており、和平が自身の名前を入れ、永遠の平和を祈願と伝えられる。

3-4. 展示室ゾーニング

展示ストーリーの構成をもとに、常設展示室のゾーニングを下图の通りとします。



4. 主要な展示手法

4－1 展示の留意点

展示テーマを実現し、資料をより効果的に見せるため、以下の点に留意します。

1. 見るだけでなく、聞き、触れ、楽しく参加しながら学べる展示
2. 分かりやすく、発見する喜びと感動が味わえる展示内容
3. 来館者のニーズを踏まえた展示の視点
4. 調査研究の成果がすぐに反映できる展示の可塑性
5. 親子で学ぶ、体験を通して学ぶことを意識した展示
6. 石川町と周囲の地域との比較から、石川町の特性がよくわかるような展示
7. 「モノ」を様々な角度から検証し、そこから見出された価値を構造的に分かりやすく伝える展示

4－2 基本的な考え方

展示手法を検討するにあたり、通常の静的な展示以外にもハンズオンや体験型展示など、来館者参加型の展示も取り入れていきます。

展示構成	・ 資料収集や調査研究を通じて明らかとなった最新の情報をもとにした展示構成
歴史を通観した 総合展示	・ 本町の歴史・文化・自然資源を通観する展示展開とし、その構成は『石川町歴史文化基本構想』でまとめた「関連文化財群」等を参照 ・ 地球から見た石川町の歴史を通観した総合的展示
ハンズオン	・ 石英（水晶）等の鉱物や、遺跡から出土した土器等に直接触れることができる「ハンズオン」コーナーの設置
体験型展示	・ 親子で楽しむことができる仕掛け型・体験型の展示
展示解説	・ 分かりやすく簡素な解説

4-3 主要展示物の展示手法

展示手法は、展示資料や伝えたい内容によって大きく異なります。ここでは、主な展示区分として、歴史資料展示、石の歴史展示、民俗資料展示、鉱物岩石標本コレクション展示の4つに分け、それぞれにおいて考えられる展示手法や目指すべき方向性について整理をしていきます。

1) 歴史資料展示

歴史資料展示は、石川町の歴史を通史で紹介する展示です。展示手法としては、展示ステージと壁面展示システムで構成するなど、気をてらわない来館者にとって見やすく、展示更新がしやすい手法とします。貴重な資料はケースに入れるなどの防犯対策及び、資料劣化を防ぐため温湿度管理を行います。また人々の歴史の流れと石の歴史の流れが一体となって見えるよう工夫をします。

2) 石の歴史展示

石の歴史展示は、石川町における石の歴史を通史的に紹介する展示です。基本的には展示ステージと壁面展示システムで構成します。重量が重い資料もあるため、強度の強い展示什器とします。また貴重な鉱物については、盗難の危険性があるため、防犯に留意します。

3) 民俗資料展示

民俗資料展示は、石川町に伝わる生業、信仰、年中行事などを紹介する展示です。展示ステージと壁面展示システムで構成し、基本的には露出展示とします。ただ資料を置くのではなく、石川町での暮らしの息遣いが感じられるよう、展示演出に工夫を凝らします。

4) 鉱物岩石標本コレクション展示

石川町の持つ石川産の貴重な鉱物や世界の貴重な鉱物などを一堂に紹介する展示です。展示空間が独立しているため、常設展示室とは空間のイメージを変えて、美術館的な展示を行います。鉱物の持つ美しさや魅力が、来館者にストレートに伝わる展示とします。

〈展示手法のイメージ図〉

1) 歴史資料展示



2) 石の歴史展示



3) 民俗資料展示



4) 鉱物岩石標本コレクション展示



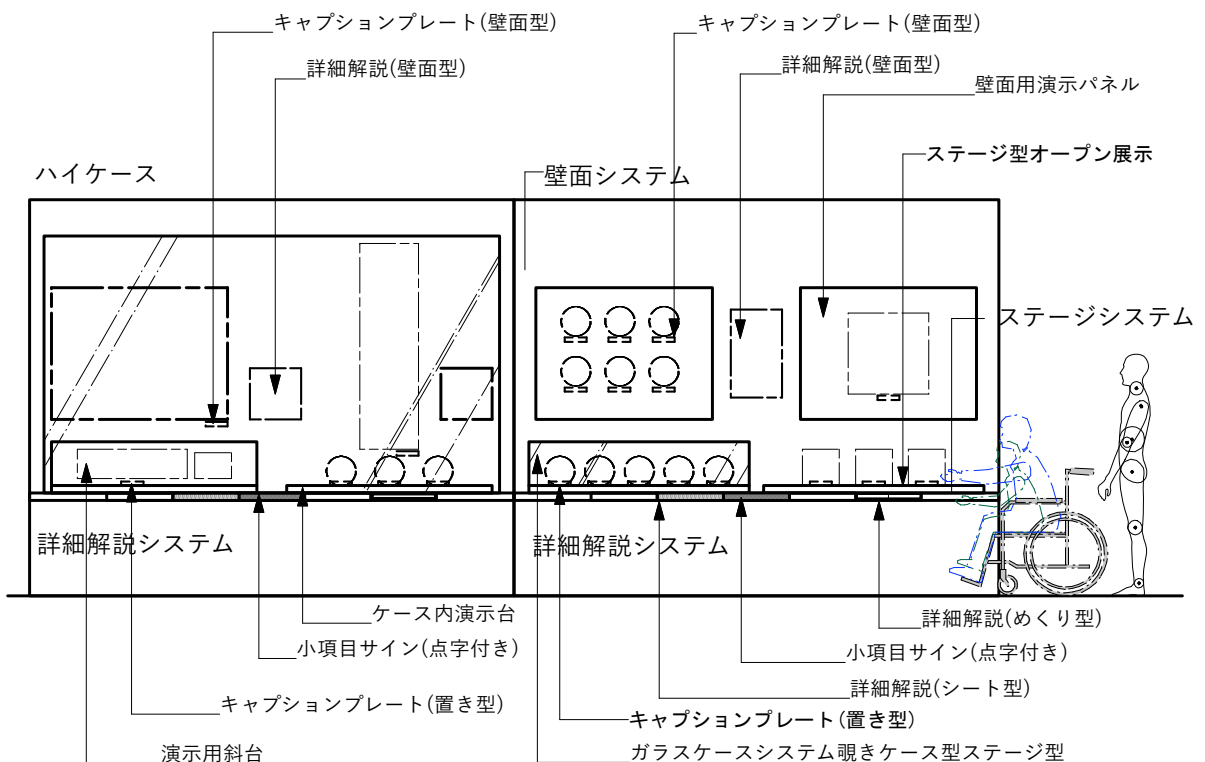
4-4 展示什器の仕様

展示什器については各パート（ステージシステム、壁面システム、詳細解説システム）の基本モジュールを設定し、展示ゾーン部分更新(再使用)、展示資料更新を展示係員が容易に行え、観覧しやすく、安全で長期使用に対応可能な造りとします。

留意点は以下の通りです。

- ・展示機能を優先した出来るだけシンプルな構成とし、展示什器のメンテナンスが容易に出来るよう、配慮します。
- ・素材は出来るだけ環境に配慮した再生可能なものを使用し、可能な限り地元産材を用いたものとします。
- ・演示システムについては特殊なものを出来るだけ少なくし、汎用性が高いものを主体とします。
- ・資料保護が必要なものについては、保護フェンス、独立したガラスケースシステム(ハイケース型、覗きケース型)を設置し、劣化防止用の素材を組み込む事により資料に優しい什器構成とします。
- ・既存の什器を改修し再使用可能な展示構成材として組み込み豊かな展示空間創りを行います。

歴史・文化・石 共通展示システム案



4 - 5 体験展示

体験展示について、以下のような手法が考えられます。いずれの手法も体験によって伝えるべき内容をよく整理し、最適な手法を選択する必要があります。

1) ハンズオン展示

解説グラフィックとともに実物資料を設置し、触ることで感触や重さ確かめます。例えば石英（水晶）などの鉱物や、遺跡から出土した土器などに触り、解説を見ながら観察し理解を深めるなどが考えられます。

2) ワークショップ

石を用いた実験や、石を材料とした手芸作品制作のような企画の実施が考えられます。

〈展示手法のイメージ図〉

1) ハンズオン展示



2) ワークショップ

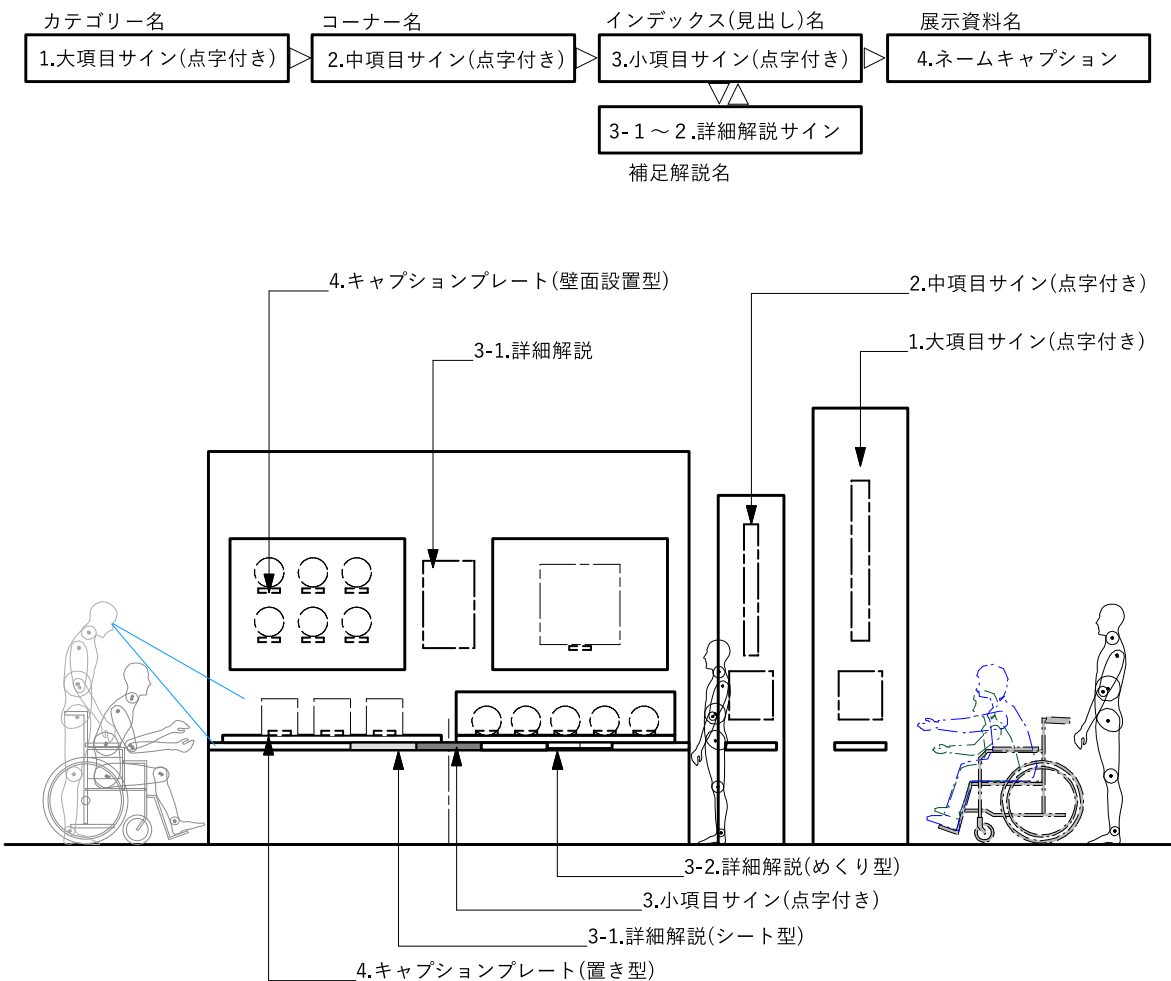


5. 情報計画

すべての来館者が興味を持って資料との対話が自然に出来るよう、展示構成内容に従って情報の階層を明確にし、解りやすく基本ルールを作り、楽しく導いていけるよう、きめ細かな情報誘導計画を行います。

- ・ 展示ストーリーを大項目（カテゴリー名）、中項目（コーナー名）、小項目（見出し名）、ネームキャプション（展示資料名）という情報階層を整理し、観覧し易い仕組みを創ります。
- ・ 大人から子供、身障者（車椅子利用）までが自然に観覧出来るようモジュール設定し、展示解説類が読み易い視認範囲、書体の種類、大きさを設定します。
- ・ 視覚障がい者のために大項目から小項目までのタイトル（一部解説文）に点字解説プレートを設置します。
- ・ 展示解説内容（小項目、ネームキャプションなど）一部更新が館内で簡単に出来るようグラフィックベース設計を行います。

歴史・文化・石 共通展示情報解説計画案



6. 収蔵計画

6-1 収蔵設備の基本的な考え方

現在の収蔵設備は、温湿度管理ができていない上に、複数の場所に保管されており、資料劣化の危険性だけではなく散逸してしまう可能性もあります。町の貴重な資料を次世代により良い状態で引き継いでいくため、また資料の散逸を防ぐためにも安定した環境の収蔵設備の整理は欠かせません。また適切な収蔵設備があれば、個人所有の貴重な資料を譲渡・寄託などの方法で町で保管していくことも可能となります。

収蔵のために求められる環境は、資料の種別によって異なります。そのため資料の種別ごとにゾーニングを行うことで、資料にとって適切な収蔵環境を整備していきます。

本館の1階は特に貴重な資料を中心に収蔵していきます。ゾーニングは紙資料、書籍、考古資料、鉱物岩石標本、民俗資料、美術資料の6つに分類します。基本設備としては、空調による温度調整、加湿除湿機による湿度調整を行います。収蔵設備は、現在使用している収蔵用の棚類を再利用し、不足分については新規購入とします。

1) 収蔵庫 1

比較的環境変化に強く重量物の多い考古資料、鉱物岩石標本、民俗資料は入口付近となる収蔵庫1にまとめます。基本的に資料は露出で保管を行います。

2) 収蔵庫 2

紙資料・書籍など環境変化の影響を受けやすい紙類は収蔵庫2にまとめます。温湿度管理を行うとともに必要に応じて中性紙の封筒や箱などに納め保管をします。

3) 美術系収蔵庫

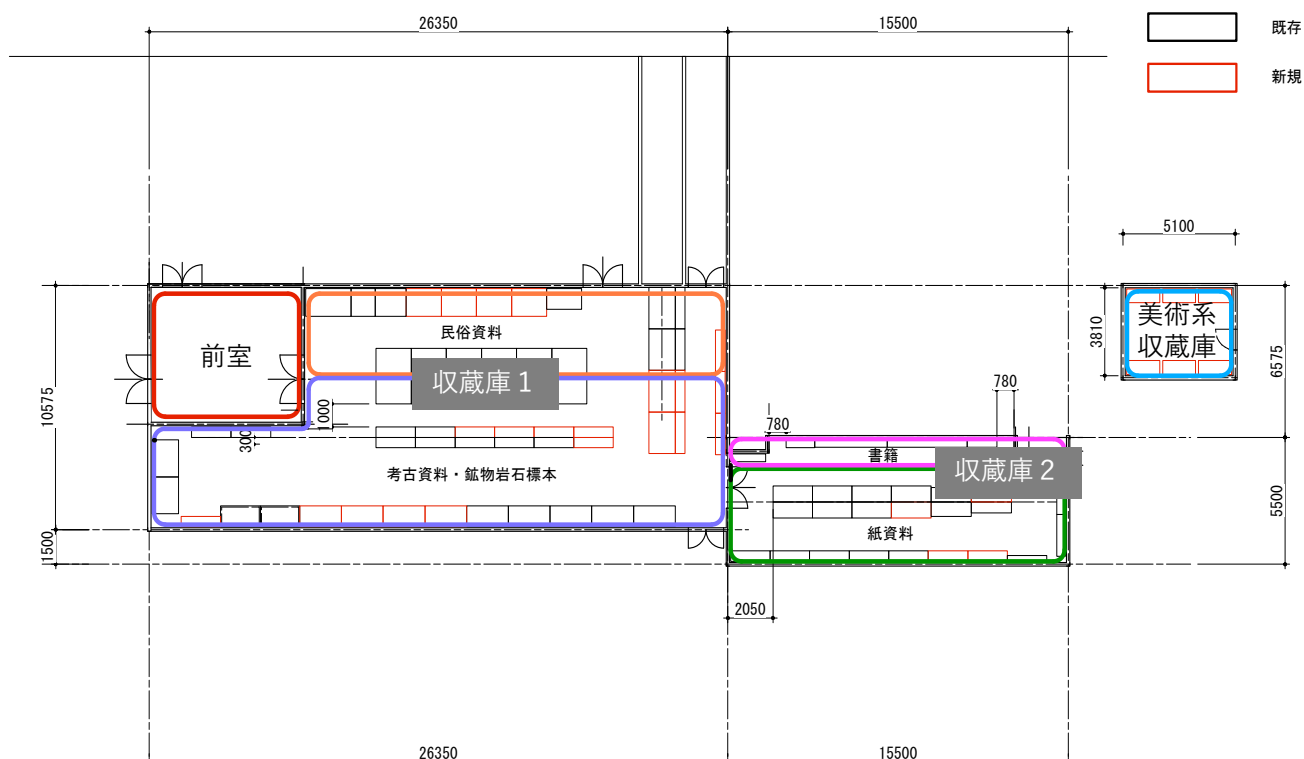
絵画など町が保有する美術品については、別室に収蔵します。

6-2 収蔵スペースのゾーニング

収蔵資料劣化を極力少なくするため2つの空間に分け収蔵します。収蔵庫1を「民俗資料、考古資料・鉱物岩石標本ゾーン」、収蔵庫2を「書籍・紙資料ゾーン」に区分します。

美術系収蔵庫については、作品を1点ずつ保護するため独立の部屋内（温湿度調整可能な空調システム）とし収納棚（中性紙入り引き出し）を設けます。

※基本的には既存什器を使用しますが、必要に応じて新規備品も考慮に入れることとします。



S=NO SCALE

7. 運営方針

7-1 活動内容

現在、想定している活動内容は多岐にわたりますが、大きくは事業関連、学芸関連、調査研究関連の3つです。

1) 事業関連

常設展示以外に実施する事業は、「企画展」「講座」「館外活動やアウトリーチ」「学校教育への支援」などがあります。各事業の内容は以下の通りです。

企画展	- 最新の調査研究成果に基づいた企画展の開催 - 年1回以上の企画展の開催 - 子どもと保護者、学校教育関係者、町民にとって魅力ある企画づくり
講座	文化財保護啓蒙に繋がる講座、講演会の開催
館外活動、アウトリーチ	- 館外での学校教育及び社会教育における郷土教育事業への支援 - 学校や社会教育施設との連携、出前講座の実施
学校教育への支援	- 児童及び生徒への学習支援 - 教職員の研修会への支援

2) 学芸関連

学芸や利用者サービスなどについては、次のような項目になります

学芸関連	公文書の管理	非現用文書（保存期間を満了した公文書）の収集・整理・保存
	寄贈受入れ	寄贈資料等の受け入れ体制
	学びの支援	個人やグループの学びに対する支援
	レファレンス	学芸員・施設ボランティアによるレファレンス・サービス
	他機関との連携	- 他のMLA（博物館：Museum、図書館：Library文書館：Archives）、学術機関、各種関係団体との連携 - 本町における文化財保護関連委員会との連携 - 学校や社会教育施設との連携
情報提供 情報発信	全町展開	本施設をビジターセンターとして、町内に所在する文化財をフィールドミュージアムとし、これらをテーマごとに繋いで巡る文化財ツーリズムの開催
	町民・来館者への 情報提供	各地の博物館施設の企画展・出版物等の情報提供
	本施設の情報発信	- 施設の活動及び運営状況に関する情報提供 - 施設ニュース・リーフレット配布、ホームページ・SNSでの情報配信

3) 調査研究関連

調査研究については、「調査研究」「データベースの作成と公開」「成果の公表」に大別できます。それぞれの内容は下記の通りとなります。

調査研究	・ 石川地方の調査研究センターを目指し、その機能の充実を図る
データベースの作成と公開	・ 所蔵資料台帳の整理とデータベース化及び公開 ・ 郷土資料及びその他の刊行物（電子的記録含む）の収集、公開
成果の公表	・ 調査成果の展示や教育普及活動への活用と、刊行物等への公表 ・ 町広報誌、ホームページ、刊行物等での研究成果の公表、企画展開催 ・ 石川町だけでなく、石川地方を包括した研究成果の公表

7-2 運営組織

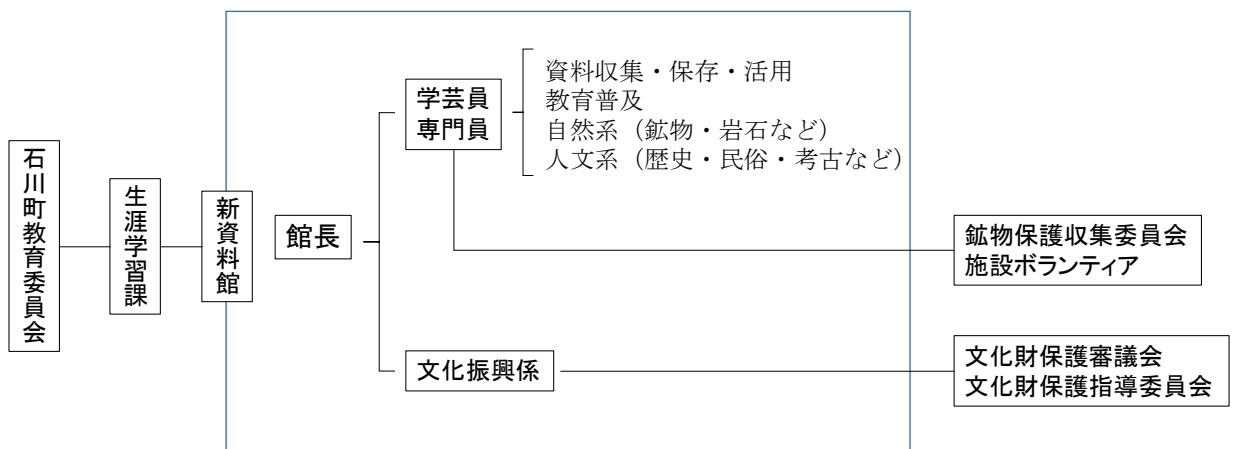
1) 石川町直営による管理運営

石川町のすばらしさを伝え、地域プライドを醸成するための拠点として、資料館が長期にわたり適正な状態を維持するため、石川町が直営で管理・運営を行います。

2) 管理運営組織の基本的なあり方

運営組織のあり方として「施設の活動を円滑にするための柔軟な組織、良質のサービスを来館者に提供できる管理・運営」が求められており、そのために「適正な人材配置」を行います。また、学芸員（正職員）を早急に採用し、学芸員を中心とした調査研究を可能とする管理・運営を行います。

管理運営体制の考え方(案)



3) 外部登用

館員以外の研究者、有識者、協力者等が参加できる開かれた体制を整備します。

4) 運営ボランティア組織

「登録ボランティア」を整備し、「施設ボランティア組織による展示解説支援や教育普及活動の支援」を想定しています。

5) 運営評価

運営評価については、「来館者からの施設運営に対する意見の聴取」「アンケート箱の設置」「学校教育関係者や施設利用者に対するアンケート調査の実施」などにより利用者や関係者からの意見を集め、「第三者からの評価」「石川町教育委員会評価委員会による事業運営評価」を受けます。

8. その他

8-1 整備スケジュール

令和2年度（2020年度） 土地・建物取得

令和3年度（2021年度） 基本構想・基本計画策定、改修工事基本・実施設計等

令和4年度（2022年度） 改修工事及び展示工事等

令和5年度（2023年度） 展示物資料搬入、付帯設備工事等

年度内に供用開始

鉱物学を専門とする学芸員採用

8-2 財源及び事業費の検討

1) 財源

空き家対策総合支援事業補助金、過疎対策事業債の活用を図ります。

2) 概算事業費（令和4年3月時点）

約5.5億円（税込）（土地購入費、建築・展示設計、工事費等）